
さくら

夏槿蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくら

【Nコード】

N5485N

【作者名】

夏槿蝉

【あらすじ】

小学生の頃病気がちだった僕は、ある日、熱を出して一人で病院に歩いて行った。朦朧とする中、一人の少女が僕のことを手助けしてくれた。元気そうな様子だった彼女と中学校で再会するが、三年生になった春の日に……。恋愛物掌編です。

僕は病院に行くのが好きだった。と言ってもあの壁や看護師や医師から構成された白い世界が好きだったというわけではない。ましてや、健康そうな老人が他人の迷惑を考えずに話しかけてくるのも、アルコールだかなんだかの鼻にツンとくる消毒の臭いなんかには嫌悪感があった。それなのに時折仮病でもして病院に行きたくなるのは、ただ単純に彼女に会えるともかもしれない。と心の奥底で考えているからだった。

僕は小さい頃から病気がちで季節の変わり目には必ずと言っていいほど熱を出していた。小学校低学年までは付き添いをしてくれていた母親だったが、高学年になるとパートを理由にして一人で通院させられることが多かったと覚えている。

あれは間違いなく五年生のときのことだった。ゴールデンウィーク前に熱を出した僕は、歩いて五分の総合病院まで来ていた。近いとは言え、体温計のデジタル表示は三十八度を超えていただろう。小学生の身には辛かったはず。事実、内科診察受付までの記憶がない。忘れたわけではないと思う。何故なら、その時のことを鮮明に思い出すことが出来るから。

わざと保険証を落としたわけではない。受付の医療事務による問診表の説明が、病人にとっては長かったのだ。だから、ポケットから出すときに握力を失った。すぐ拾おうと思ったが、自分の体が水中にいるときのように重たくて動けない。そんな状態なのにピンボケて網膜に映る医療事務の苛立ちだけは痛いほど感じられる。

一度しゃがんだら立ち上がれない。僕は、そんな予感を心の片隅に浮かべつつ冷たそうな床に近づこうとした。

「大丈夫？」

何処からか突然現れた彼女は、微笑んでから拾った保険証を受付に渡す。医療事務のおばさんは、無表情で受け取ると、椅子に座れ

と命令する代わりに背を向けて他の仕事を始めた。それを合図に待合場所の長椅子に僕たちは並んで腰掛ける。

「私のこと知っている?」

振り向こうとした。でも、体が拒否する。仕方がないので視線だけ送る。

彼女は元気そうだった。頬は白いが赤みがあり生命観は失われていない。肩まである髪はさらさらしていて息を吹きかけたら大騒ぎしそう。風邪で嗅覚がやられていなければ、きつといい匂いがするだろうと漠然と考える。白いパーカーに細い紺色をしたデニムのパンツ。テーマパークに遊びに行くような爽やかな雰囲気。

「私は知っているよ」

その言葉に僕は記憶の糸を辿り始める。そう言われてみると学校で会ったことがあるような気がしてくる。ただ、自信も無いし、夢を見ているかのように考えが纏まってこない。それでも意識を集中しようとして椅子に力なくもたれた。

「話しかけちゃってごめんね。私も熱あるときはそんな感じなのに、ちよつとでも良くなると忘れちゃうんだよね」

そう言っただけ。体がだるいことを免罪符にそのまま沈黙を続けた。

僕の名前はすぐに呼ばれた。看護師の声に反応する。壊れかけのロボットのようになり立ち上がり、歩き出す。

「頑張つて」

単なる病人に頑張るようなことなど何も無い。勿論、そんなことを言っつもりも気力もない。

元気な状態ならば数秒で到着する診察室まで。僕は彼女が送ってくれていることに気づかない。ドアを開けて入る瞬間に右手を軽く振っている彼女が見える。嬉しかった。医師におさまりの診察を受けている間も看護師に注射をされている間もその気持ち伝える言葉を考えていた。でもいい台詞は浮かんでこない。

診察室をでると真つ先に彼女を探した。だが、見当たらない。当然のことだと分かっているにも寂しかった。心の片隅で期待していた彼女が待っていてくれることを。

僕はさっきと同じ長椅子に座る。ぬくもりが失われて冷たくなった場所は、熱がある体には少しだけやさしく感じられた。

中学生になつてクラスは一緒にならなかったものの、美術部で再会した。病院では会うたびに話をしていたから、再会というほど大げさなものではない。

「やあ」

彼女は微妙な挨拶をしてきた。心臓の鼓動は何故か速くなる。でも平静さを装う。

「ここに決めたの？」

僕の小声の質問に黙つて頷く。それを見たときに僕の中では他の部活動の候補は消滅していた。

二人は性格というよりもっと根源的な部分で似通っている。僕はそう感じていた。クラスの女子たちは勿論のこと、男子の友人たちより気持ちが分かるよう。近くにいてストレスが溜まることもない。むしろ、お互いの存在を感じるだけで癒されるようだった。彼女がいない日のデッサンはちっとも進まない。下校を促す曲が流れるまで無意味に校庭を眺めているだけ。出席日数が心配になるくらい彼女は休んでいたから、僕の描く絵は遅々として仕上がるまで時間がかかる。それでも、三年生になるまでにはそれなりにデッサンやらポスターやらを完成させていた。

それは僕が三年生になつた始業式から丁度一週間後の昼休みだった。

「ねえ、引越しするって聞いた？」

同じクラスになつた美術部の女生徒が話しかけてきた。僕は、何のこと？ と答える。すると女生徒は芝居がかった表情で説明を始

める。聞き進めるほどに自分の顔が青ざめていくのが分かる。女生徒は僕のことを気にもせず話を進めていたが、段々と横道に逸れていく。聞いていたら嫌気が差してきたので口を出す。

「何で知っているの？」

「本人が教えてくれたから。聞いていないの？」

女生徒はしばらく一人で話し続けていたが、記憶にない。当然のこと午後の授業も上の空だった。

僕はたゆたう気持ちを隠しながら部室にいた。堂々巡りになりそんな思考を排除するためにクロツキーを行う。絵を描いている間は余計なことを考えない。速写ならなおさらのこと。僕は校庭にいた野球部員をモデルにして没頭する。

「上手だね」

鉛筆を置き大きく息を吸ったところで、彼女が声をかけてくる。

振り返ると幽霊のように現れた彼女が立っていた。僕は彼女に向かって口を開きかけたところで、重苦しい緊張感を感じる。クラスメイトの女生徒だけではない。後輩たちも聞き耳を立てている。いくらデッサンに夢中になっている振りをして、手が止まっていれば一目瞭然。

僕は立ち上がり彼女の手を取る。軟らかく、少しだけ冷たい。

「ちよ、ちよっと。何処に行くの？」

僕は黙ったまま彼女を引っ張る。目的の場所があったわけではない。人目につかない場所を探していただけだった。校舎を繋ぐ渡り通路に来たところで、彼女は突然手を引く。

「待って」

か弱い声とともに彼女は丸くなって咳き込む。僕は慌てて立ち止まり、彼女の背中をさする。すると一分も経たないうちに発作はおさまり、呼吸が落ちついてくる。

「もう平気。心の準備ができていなかったから、体がびっくりしちやった」

彼女は無理やり微笑する。

「何でこんな時期に？」

「卒業するまで。って言ったのだけど……」
「でも」

僕は誰もいない中庭に視線を移す。視界の片隅で彼女が顔を上げる。その動きに反応して向き直った僕のことを真摯に見つめている。「引越すだけだから。いなくなるわけじゃないから」

冷気を含んだ春風が僕たちに襲い掛かると、彼女は驚いたように髪を押さえる。いくつかの花びらが降ってきてセーラー服の模様になる。水玉みたい。そう思いながら吸い込んだ空気に春と彼女の匂いがして、僕の苛立ちを溶かしていく。

幾年を経た今も春になると思い出す。特に花びらの雪が降る日には。唐棣色の世界の中で、微笑んだ彼女が存在している。間違いない。実在している彼女が伸ばしてきた手を、微熱の中で掴み損ねる。握り締めた僕の手には一片の淡い色が残っていて、ほのかに甘い匂いがしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5485n/>

さくら

2010年10月8日14時15分発行